



# 「子ども農山漁村交流プロジェクト

## ～農山漁村は体験学習メニューの宝庫です」

～株式会社農協観光

バケツや校庭の水田で稲を栽培したり、遠足や林間学校などで、田植えや稲刈りの体験をしたりする学校が増えてきました。株式会社農協観光(以下「農協観光」という。)では、校外の体験学習の受入れを行っています。その事前事後学習としてJA職員や農家の方が教室に来てくれる「子ども農山漁村交流プロジェクト」を実施しています。今回は、小平市立小平第十四小学校(水野正志校長)で実施された活動の様子を紹介します。

今回の講師は、茨城県石岡市から、やさし農業協同組合の柴山さんが来てくれました。授業が行われた1週間前に校庭の田んぼに苗を植えた5年生は、とても真剣な表情で最初のあいさつをしました。

柴山さんは、まず稲がどのように育っていくか、教えてくれました。1か月位したら、水を抜いて(これを「中干し」と言います)、根に新鮮な酸素を与えるとともに、茎がそれ以上増えないようにします。1週間したらまた水を入れ、1か月位で花が咲き、さらに1か月後に稲を収穫できるようになります。農家の方の一番の仕事は、水の管理です。朝に昼に、田んぼに行っては水の量を調整します。機械ができる前は、草取りがとても大変な仕事で、とても手間がかかりました。「米」という



字は、分解すると「八十八」、つまり、88もの手間がかかるという意味がある字なのです。

次に、柴山さんは籾を見せてくれました。籾の中には、栄養がたくさん入っているの、こ

の栄養で芽や根が出てきます。お米は生き物です。そして、私たちが食べている豚や牛、ほうれんそうも生き物です。私たちが、食事の前に「いただきます」と言うのは、この命をいただいて生きているからです。

日本中には、たくさんの田んぼがあります。田んぼには、命あるものが育っています。稲だけではなく、虫も、赤とんぼもいます。さらに、田んぼには、雨をためて川の氾濫を防ぐ天然のダム役割りもあります。水を張った田んぼの上を通る風はとても涼しい風になり、気温を下げてくれます。このようにして、田んぼは自然環境を守る、という働きもあります。

子供たちからは、種類によって収穫できる量は違うのか、どのくらいお米の種類があるのかなどの質問があり、柴山さんが実際に作っている稲の種類なども含めて答えてくれました。

### この授業のここがポイント!

- 農協観光が用意したテキストを使いながら、農家の方から直接、米づくりの話を聞くことができます。
- 事前学習、体験、事後学習と体験を中心とした流れで授業を実施することができます。



### 株式会社農協観光 グリーンツーリズム事業本部 教育旅行課長の伊藤さんにお話を伺いました

現在、都市部に住む子供たちは、農山漁村で実体験する機会がとても少なくなってきています。農協観光では、地域の人々や子供たちの心の交流を深め、豊かな人間関係を育てるために、農山漁村での農業体験をはじめ自然体験や社会体験、職業体験、文化体験、奉仕体験などの体験学習について、全国のJAとの連携のもとで、受入の体制整備を行なっています。

受け入れ側のJA・農家の方々も、子供たちに少しでもその地域での特性や農業について理解していただくために、心温かいおもてなしの心を持った受入に努めています。

今年度から「子ども交流プロジェクト」として、三省(文科省・農水省・総務省)の連携のもと、農山漁村での一週間程度の

宿泊行事をモデル的に実施し、子供たちの学ぶ意欲や自立心、思いやりの心、規範意識の豊かな人間性や社会性を育むための活動が始まりました。農山漁村は、様々な地域資源を組み合わせた体験メニューを提供することができますので、子供たちが本物に出会い、心より感動し、すばらしい仲間作りをする絶好のフィールドであるのは間違いありません。JAグループでは、今まで培ったノウハウを活かして「JA子ども交流プロジェクト」を発足し、積極的に子供たちの受入を行なっていきます。

